

難波

古名

難波梅

世阿弥作

前

ワキ 官人

シテ 老翁

ツレ 男

後

ツレ（天女） 木花開耶姫

シテ 王仁

地は 摂津

季は 正月

「山も霞みて浦の春。く。波風静かなりけり。

「抑是は当今に仕へ奉る臣下なり。我三熊野を信じ。

毎年としごもり仕り候。此度は所願成就し。年

帰る春にも為り候へば。唯今都に下向仕り候。

「春立つや。実にも長閑けきかざなぎの。く。浜

の真砂も吹上の。浦伝ひして行く程に。早くも紀
路の関越えて。是も都か津の国の。難波の里に着
きにけり。く。

「君が代の。長柄の橋も造るなり。難波の春も幾久

し。

「雪にも梅の冬籠。

「今は春べのけしきかな。

「夫れ天長く地久しくして。神代の風長閑に傳はり。

「皇の賢き御代の道広く。国を恵み民を撫でゝ。四

方に治まる八洲の波。静に照らす日の本の。影ゆ
たかなる時とかや。

下歌 「春日野に。 若菜摘みつゝ万代を。

上歌 「祝ふなる。 心ぞしるき曇りなき。 く。 天つ日嗣

の御調物。 運ぶ巷や都路の。 直なる御代を仰がんと。 関の戸さゝで千里まで。 普く照らす日影かな。

く。

ワキ詞 「如何に是なる老人に尋ぬべき事の候。

シテ詞 「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。

ワキ 「不思議やな諸木こそ多き中に。 是なる梅の木蔭を

立ち去らずして。 陰を清め賞翫し給ふ事不審なり。 若し此梅は名木にて候ふか。

シテ 「御姿を見奉れば。 都の人にて御坐候ふが。 此難波の浦に於て。 色異なる梅花を御覧じて。 名木かとの御尋ねは御心なきやうにこそ候へ。

ツレ 「夫れ大方の春の花。 木々の盛は多けれども。 花の中にも始めなれば。 梅花を花の兄ともいへり。

シテ 「其上梅の名所々々。 国々所は多けれども。 六義の

始めのそへ歌にも。難波の梅こそよまれたれ。

ツレ「御代も開けし栄花といひ。

シテ「普き花の嘉例と云ひ。

二人「とにもかくにも津の国の。此や都路の難波津に。
名を得て咲くやこの花を。名木かとの御尋ねは。
事あたらしき御錠かな。

ワキ「実にく難波の梅の事。名木やらんと尋ねしは。
愚かなりける問事かな。然れば歌にも難波津に。

咲くやこの花冬ごもり。今は春べと咲くやこの。
花の春冬かけてよめる。歌の心は如何なるぞ。

シテ「それこそ帝をそへ歌の。心詞は顕はれたれ。難波
の御子は皇子ながら。未だ位に即き給はねば。冬
咲く梅の花の如し。

ワキ「御即位ありて難波の君の。位に備はり給ひし時は。
シテ「今こそ時の花の如く。

ワキ「天下の春を知ろしめせば。

シテ「今は春べと咲くやこの。」

ワキ「花の盛は大鷦鷯の。」

シテ「帝を花にそへ歌の。」

ワキ「風も治まり。」

シテ「立つ波も。」

地「難波津に。咲くやこの花冬ごもり。く。今は春

べに匂ひ来て。吹けども梅の風。枝を鳴らさぬ御
代とかや。実にや津の国の。何はの事に至るまで。

豊かなる世の例こそ。実に道広き治めなれ。く。

地クリ

「抑難波津の歌は帝の御始め。又浅香山の詞は。采
女の土器とりぐなり。」

シテサシ

「昔唐国の堯舜の御代にも越えつべし。」

地

「万機の政おだやかにして。慈悲の波四海に普く。
治めざるに平かなり。」

シテ

「君々たれば臣も又。」

地

「水よく船を浮ぶとかや。」

クセ「高き屋に。登りて見れば煙立つ。民のかまどは賑ひにけりと。叡慮にかけまくも。かたじけなくぞ聞えける。然れば此君の。代々にためしを引く事も。実に有難き詔。国々に普く。三年の御調ゆるされし。其年月も極まれば。浜の真砂の数積りて。雪は豊年の御調物。ゆるす故にや中々。いやましに運ぶ御宝の。千秋万歳の。千箱の玉を奉る。

シテ「然れば普き御心の。

地「いつくしみ深うして。八洲の外まで波もなく。広き御恵。筑波山の陰よりも。茂き御陰は大君の。国なれば土も木も。栄えさかふる津の国の。難波の梅の名にしおふ。匂ひも四方に普く。一花ひらくれば天下皆。春なれや万代の。なほ安全ぞめでたき。

ロンギ地「実に万代の春の花。く。栄え久しき難波津の。昔語りぞおもしろき。

シテ「実に名にしおふ難波津に。鳥の一声をりしもに。

鳴く鶯の春の曲。春鶯囀を奏せん。

地「不思議や御身誰なれば。かく心ある花の曲。舞楽

を奏し給ふべき。

ツレ「我は知らずや此梅の。春年々の花の精。

地「今一人の老人は。

シテ「今ぞ頭はす難波津に。

地「咲くやこの花と詠どつゝ。位をすゝめ申せし。百

濟国の王仁なれや。今もこの花に戯ぶれ。百囀の

声立て。春の鶯の舞の曲。夜もすがら慰め申すべ

しや。下臥して待ち給へ。花の下ぶしに待ち給へ。

（中入）

ワキ歌

「見て暮らす。花の下臥更くる夜の。く。月影と

もに静かなる。けしきに染みて音楽の。花に聞ゆ

る不思議さよ。花に聞ゆる不思議さよ。

後ジテ

「誰かいひし春の色は。東より来るといへども。南

枝花初めて開く。こゝは所も西の海に。向ふ難波
の春の夜の。月雪もすむ浦の波。夜の舞樂はおも
しろや。夢ばし覺まし給ふなよ。

天女
「是は難波の浦に年を経て。ひらくる代々の恵みを
受くる。木花開耶姫の神靈なり。」

シテ
「我は又百済国より此国に渡り。君をあがめ国を守
る。王仁と云ひし相人なり。」

地
「むかし仁徳の御宇には。御代の鏡の影をうつし。」

シテ
「治まる御代の栄花をなししも。」

地
「この花の匂ひ。」

シテ
「又は開くる言の葉の緑。」

地
「何はの事か法ならぬ。遊び戯ぶれいろくの舞樂。
おもしろや。」
(舞)

天女
「梅が枝に来居る鶯春かけて。」

シテ
「鳴けども雪は。古き鼓の苔むして。打ち鳴らす。
く。人もなければ君が代に。」

地 「懸けし鼓も。

シテ 「時守の眠り。

地 「覚むるは難波の。

シテ 「鐘も響き。

地 「浦は潮の。

シテ 「波の声々。

地 「入江の松風。

シテ 「村蘆の葉音。

地 「いづれを聞くも悦びの。諫鼓苔むし難波の鳥も。

驚かぬ御代なり。有難や。
(神舞又は楽)

ロンギ地 「あらおもしろの音楽や。時の調子にかたどりて。

春鶯囀の樂をば。

シテ 「春風と諸共に。花を散らしてどうと打つ。

地 「秋風樂は如何にや。

シテ 「秋の風もろ共に。波を響かしどうと打つ。

地 「万歳樂は。

シテ「よろづ打つ。

地「青海波とは青海の。

シテ「波立て打つは採桑老。

地「抜頭の曲は。

シテ「かへり打つ。

地「入日を招き帰す手に。く。今の太鼓は波なれば。

よりては打ち帰りては打ち。此音楽に引かれつゝ。

聖人御代にまた出で。天下を守り治むる。万歳楽

ぞめでたき。く。